

農学部キャンパスの野鳥 (1989 ~ 1990)

第2報 生息環境の変化と野鳥の種類 (その1)

堤 将和・松沢安夫

昨年に引き続き、今年も農学部キャンパスの野鳥の生息調査を行ったので、その結果を報告する。

〔調査方法〕

1) 調査区域の概要

調査区域は昨年と同様、農学部甲地区、乙地区に限定した¹⁾。今年はまだ農学部施設整備が具体的に実施されていないので、キャンパス内の環境は昨年とくらべ大きな違いはなかった。しかし、甲地区と乙地区の間を通る県道の整備が一部行われ、これに伴って乙地区の植物園、廃水処理施設の県道側樹木が伐採された(樹高約20m, 径30~50cmの杉3本, 樹高約15m, 径40~50cmのエノキ3本, 径約50cmの桜1本)。その他モウソウチク数本と低木の茂みを取り払われた。整備後は時計台、庭石、ベンチなどを備えたスポット公園となっている。また、この工事に伴ってこの場所に植えられていたシノブヒバ約40本が、一時他の場所へ移植され、工事終了後再び定植されたが、このうち約15本が枯死または枯死寸前の状態になっている(1990年9月現在)。

2) 観察道具および調査方法

観察に必要な双眼鏡、望遠鏡、図鑑ならびに調査方法は昨年に準じて行った¹⁾。今回の調査回数は、ベルト・トランセクト・センサス法(BT調査)24回、随時調査85回で、合計109回となった。

〔調査結果ならびに考察〕

1) 農学部キャンパスで確認された野鳥

昨年農学部キャンパスで確認された野鳥は17科28種であったが、今年には19科32種であった。この中で昨年確認され、今年出現しなかった野鳥はホトトギス、シロハラの2種であった。一方、今年初めて出現した野鳥はキジ(*Phasianus versicolor* Japanese Pheasant)、フクロウ(*Strix uralensis* Ural Owl)、セグロセキレイ(*Motacilla grandis* Japanese Pied Wagtail)、ピンズイ(*Anthus hodgsoni* Indian Tree Pipit)、イソヒヨドリ(*Monticola solitarius* Blue Rock Thrush)、アトリ(*Fringilla montifringilla* Brambling)の6種であった。従っ

て、これまで本キャンパスで確認された野鳥は、合計19科34種となった。

キャンパス内の環境変化としては、前述のように、乙地区の一部で樹木の伐採が行われた程度であり、キャンパス全体からみれば、ごく小範囲にとどまるものであった。しかし、伐採された樹木が比較的高木であったこと、高木の下での茂みを形成していた低木類が取り払われたこと、工事期間中は騒音や人の出入りも多く、工事期間も約6カ月(10~3月)と長かったこと、しかもこの地域に多くの野鳥が生息していたこと¹⁾、を考えると、野鳥に対する生息環境の変化は意外に大きかったものと思われる。例えば、昨年この地域でのみ確認されたコジュケイ、ホトトギス、シロハラを今年は確認できなかったし、低木の茂みを好むアオジは昨年7回出現したが、今年は3回と減少し、ウグイスは昨年10回、今年は3回と激減した。また、例年廃水処理施設から動物放牧場付近の開けた地域に、5~20羽の群れで飛来していたカシラダカも、今年は1~3羽の少数で、しかも確認回数は7回と昨年の19回を大きく下回った。カシラダカの場合は、たまたまこの地域が工事用資材置場として利用されたので、恐らく工事に伴う人の出入りに影響されたのではないと思われる。コジュケイ、ウグイス、アオジなどの減少は茂みの伐採など、生息環境の変化によるものと思われる。

2) 農学部キャンパスの月別野鳥分布

表1に農学部キャンパスの月別野鳥分布を示した。表1から明らかなように、ほぼ年間を通じて見ることができた野鳥は、キジバト、ハクセキレイ、ヒヨドリ、モズ、カワラヒワ、スズメ、ムクドリ、オナガ、ハシボソガラスの9種であったが、昨年見られたハシボソガラスを今年は毎月見ることができなかった。なお、昨年と同様、野鳥は夏期よりも冬期に多く見ることができた。

代表的な渡り鳥であるツバメの初認は4月4日で、終認は9月1日(昨年はそれぞれ4月18日~9月15日)であった。カシラダカの初認は11月29日、終認は3月21日(昨年は12月11日~4月25日)、ツグミの場合は、11月26日~4月15日(昨年は11月6日~5月2日)、ジョウビタキは10月21日

表1 農学部キャンパスの月別野鳥分布

野鳥名	月											
	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9
コサギ	◇◆		◆	◇	◇			◇		◇		
キジ									◆			
コジュケイ			◆							◇	◇	
キジバト	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆
カッコウ ホトトギス								◆	◇			◇
フクロウ								◆				
ツバメ							◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇
キセキレイ ハクセキレイ セグロセキレイ ビンズイ	◆	◇◆	◇◆	◆	◇◆	◇◆	◆	◇	◇◆			
ヒヨドリ	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆
モズ	◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◆	◆	◆	◆	◆		◆
ジョウビタキ イソヒヨドリ アカハラ シロハラ ツグミ ウグイス	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇	◇		◆			
エナガ	◆	◆		◇◆	◇◆	◇	◆	◆	◆		◇	
シジュウカラ		◆			◇◆	◇◆	◇	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆
メジロ		◆	◇◆	◇◆	◇◆	◆						
ホオジロ カシラダカ アオジ		◆		◇	◇◆	◇	◆					◆
カワラヒワ アトリ シメ	◆	◆	◆	◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇	◆
スズメ	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆
ムクドリ	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆
オナガ ハシボソガラス ハシブトガラス	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆	◇◆
月別出現数の 総数	11 13	14 21	18 21	21 21	23 21	18 19	16 18	15 15	14 15	13 10	14 9	11

◇印：1988年10月～1989年9月

◆印：1989年10月～1990年9月

～2月24日（昨年は10月10～4月12日）であった。したがって、各渡り鳥の今年の滞在期間は、ツバメ150日（昨年は151日）、カシラダカ113日（昨年は135日）、ツグミ141日（昨年は177日）、ジョウビタキ127日（昨年は185日）となり、冬鳥の滞在期間が非常に短期であった。また、渡り鳥の終認はいずれも昨年より、ツバメで14日、カシラダカで35日、ツグミで17日、ジョウビタキで48日早くなったが、例年この程度の幅があるのかどうか、今後とも注目して観察していきたいと思っている。

3) ヒヨドリ、スズメ、ムクドリの月別分布

農学部キャンパスにおけるヒヨドリ、スズメ、ムクドリの月別分布を図1に示した。

図1は昨年と同様、月2回のBT調査の結果を合計羽数で示した。なお、昨年の傾向との関連をみるため、昨年の結果も同様に図示した。ヒヨドリは2月から増加しはじめ、4月には最大羽数となり、5月以降減少し、夏期に最小羽数となった。年間を通じて羽数の推移は、昨年とほぼ同じ傾向を示したが、年間累計羽数は昨年の216羽にくらべ、今年は168羽（約22%減）と少なかった。

ムクドリは2月から4月にかけて増加し、4月から5月にかけて最大羽数となり、6月に急減した。この月別分布傾向は昨年とほぼ同じであったが、昨年よりも大幅に羽数は減少した。従って、年間累計羽数も昨年の319羽にくらべ、今年は213羽（約33%減）となった。

スズメは昨年と同様、年間を通じて大きな変動はみられなかったが、ヒヨドリ、ムクドリと同じように出現羽数は減少した。年間累計羽数は昨年の824羽にくらべ、今年は593羽（約28%減）となった。このようにヒヨドリ、スズメ、ムクドリとも今年は昨年にくらべいずれも減少した。

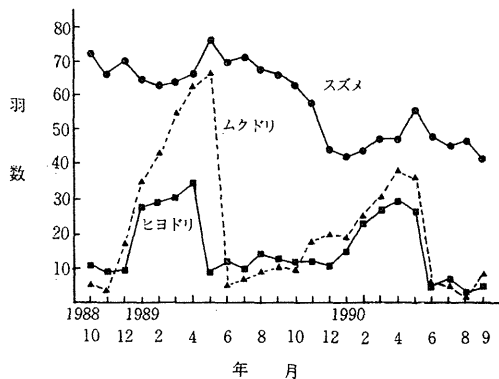


図1 ヒヨドリ、スズメ、ムクドリの月別分布

今年は施設整備も具体的に行われていないので、これらの野鳥の生息環境を大きく変えるような環境変化は少なかったと思われる。それにもかかわらず、昨年に比べると、ヒヨドリ、スズメ、ムクドリの減少と、前記のカシラダカ、ジョウビタキの終認の早さは注目される。そこで今年の気象的特徴に注目し、水戸気象台で水戸地方の気象（桜の開花時期、降水量、日照時間、気温）を調べた（土浦市や阿見町の気象の公式記録はない、とのこと）。

この記録によると、今年の桜の開花は3月25日、これは過去30年のなかで最も早い開花（例年は4月6日）である。このこととカシラダカ、ジョウビタキの北への渡りが早かったこと、との関連については明確ではないが、興味のあるところである。

今年のこれまでの降水量は、全体的にみれば平年並であったが、5月の降水量は80mm（平年は約150mm）、6月は70mm（平年は約135mm）と少なかった。なお、日照時間は各月とも平年並であったが、気温の方は全体的に高く、特に8月の平均気温は26.5℃（平年は24.8℃）と史上2番目の高さであった。

このように、野鳥の繁殖期である春期から夏期の間に異常気象がみられたことは、野鳥の生息状況にも影響を及ぼしたのではないだろうか？ また、渡り鳥に比べて、比較的狭い範囲を生活圏としているヒヨドリ、スズメ、ムクドリの月別羽数および累計羽数が、例年を大きく下回ったことと異常気象との間にも関連があるかもしれない。

【要約】

1) 農学部キャンパスで、昨年は確認されず、今年初めて確認された野鳥は、キジ、フクロウ、セグロセキレイ、ビンズイ、イソヒヨドリ、アトリの6種であった。従って、これまで本キャンパスで確認された野鳥は、合計19科34種となった。

2) 昨年確認され、今年確認されなかった野鳥はホトトギス、シロハラの2種であった。その他、昨年はコジュケイ、ウグイス、カシラダカ、アオジなどが、植物園や廃水処理施設付近でかなりの回数出現したが、今年は著しく減少した。道路工事による樹木の伐採や騒音、人の出入りなどの環境変化のためと思われる。

3) 今年は、渡り鳥の渡りの時期が大きく変わった。特に、ジョウビタキ、カシラダカの終認は昨年より1ヶ月以上も早く、また冬鳥の滞在期間も短かった。今年は桜の開花時期が過去30年の中で最も早かったことなど、気象的要因が原因として考えられる。

4) ヒヨドリ, スズメ, ムクドリの月別分布は昨年と同じ推移を示した。しかし, これらの野鳥の年間出現累計羽数は大きく減少した。その理由は明らかでないが, 今年は5月から6月にかけての少ない降水量, 春期から夏期にかけて平均的に気温が高かったことなど, 異常気象であったことと関連しているのかもしれない。

〔文献〕

- 1) 堤 将和・松沢安夫：茨大農学術報告, 37, 103 (1989)

Wild Birds Observed in the Campus of the Faculty of Agriculture, Ibaraki University

II. Change of habitat environment and species of the wild birds in the campus (1)

MASAKAZU TSUTSUMI and YASUO MATSUZAWA

The effects of changes of habitat environment on wild birds were investigated in the Ami-campus. The bird census was done from October, 1989 to September, 1990.

- (1) Six species of Japanese pheasant, ural owl, Japanese pied wagtail, Indian tree pipit, blue rock thrush and brambling were observed anew in this census. Therefore, the wild birds which observed in Ami-campus summed up to 19 families and 34 species.
- (2) Two species of little cuckoo and pale thrush were not observed in this census though these birds were seen in the last year. The frequency of appearance of wild birds such as Chinese bamboo partridge, Japanese bush warbler, rustic bunting and black-faced bunting decreased as compared with the previous census. Probably, the decrease in these birds may result from the felling of a few dominant trees and a number of bushes in the botanical garden, the noise of road repairing and the visitors to that place.
- (3) Winter birds such as daurian redstart and rustic bunting migrated to the north above 30 days earlier than last year and the length of their visit was also short. It is thought that unusual warm winter stimulated their migration.
- (4) The seasonal changes of number of Brown-eared bulbul, tree sparrow and grey starling were investigated. The tendency of monthly distribution of these birds was similar to the previous census, but the number of birds decreased markedly. It may be one of the cause of the decrease that abnormal weather was continuous from spring to summer, especially small precipitation in May and June, and the rise of the mean temperature in spring and summer.

(Sic. Rep. Fac. Agr. Ibaraki Univ., No.38, 121 ~ 125, 1990)